様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 15 日現在

機関番号：24505
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21792231
研究課題名（和文）
ICU での人工呼吸器装着患者と看護師とのコミュニケーションに関する研究
研究課題名（英文）
Research on communication between ICU Nurses and Mechanically Ventilated Patients
研究代表者
山口　亜希子（YAMAGUCHI　AKIKO）
神戸市看護大学・看護学部・助教
研究者番号：30405336

研究成果の概要（和文）：ICU における人工呼吸器装着と看護師とのコミュニケーションの看護実践向上への示唆を得ることを目的に研究を行った。看護師はコミュニケーションに時間をかけることなく患者が伝えるメッセージを素早く引き出し理解していくこと、コミュニケーションが機能しない場合でも患者の苦痛を軽減するケアを提供し続けることが重要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This research clarified nursing practices for communication between ICU nurses and mechanically ventilated patients in order to obtain ideas for improving ICU nurses' communication practices with mechanically ventilated patients. The research results indicated that, in order for ICU nurses to improve their communication practices with mechanically ventilated patients, it is important that nurses should understand patients' message quickly and nurses keep on caring to relieve patients' suffering unless communication functions.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学
キーワード：重篤・救急看護学

１．研究開始当初の背景

ICU における人工呼吸器装着患者は呼吸器を装着することで様々な苦痛体験をしていることが明らかとなっている。下川他（1987）は、ICU で気管挿管による呼吸管理が行われた患者を対象に、気管挿管中に最も苦痛であった体験を調査した。結果、患者は話すことができないこと、呼吸困難感、喉の痛みを苦痛に感じていたことを報告した。また、渡辺他（1991）は、ICU・CCU の気管挿管患者の苦痛体験を調査した。結果、眠れないこと、臥床状態にあること、コミュニケーションが取れないこと、吸痰を苦痛と感じていたことを報告した。また、心臓術後患者を対象に行った江端(1987)の研究においても

同様の結果が報告されている。一方、諸外国の研究では、Pennock BE（1994）が、外科系 ICU に入室した予定心臓バイパス術後患者を対象に、最もストレスフルであったと受け止めた出来事について調査した。その結果、患者は挿管されていたこと、話すことができなかったことを最もストレスフルな出来事として受け止めていたことを報告した。これらの研究は、人工呼吸器装着中のコミュニケーションに焦点を絞った研究ではないが、全ての研究において、必ずコミュニケーションの困難さが報告されており、患者にとってコミュニケーションの困難さがいかに大きな問題であるかが窺える。そして、コミュニケーションに焦点を絞った研究では、コミュニケーションの困難さが患者にもたらす問題がさらに明らかとなっている。Hafsteindottir TB（1996）は、ICU での人工呼吸器治療患者のコミュニケーションの体験を現象学的方法で研究した。患者はコミュニケーションの体験をはっきりと覚えており、その体験は概して否定的であった。全ての患者は、最初に障害されたものとしてコミュニケーションを体験したが、それでも感情や思考を伝えようと努力をしていた。そして、そのコミュニケーションの努力が無益に終わると患者は諦めや極度の疲労を体験していたと報告した。また、Stacy CM（2004）は、ICU での人工呼吸器治療患者のコミュニケーションの体験を metasynthesis（メタ統合）した。患者は話すことができず理解されないことでニーズが満たされない体験をし、人間性を奪われた感覚までも体験していたことを報告した。

以上より、人工呼吸器装着患者が体験している多くの苦痛は、コミュニケーションの困難さが関与していることが考えられる。つまり、人工呼吸器装着患者が体験するコミュニケーションの困難さを解決すれば、患者が体験する苦痛は軽減すると考えられる。そのためには、人工呼吸器装着患者がどのような点にコミュニケーションの困難さを感じているか、また看護師に望むコミュニケーションの実践の詳細を明らかにしていかなければならない。

２．研究の目的

ICU での人工呼吸器装着患者のコミュニケーションの体験を明らかにし、ICU における人工呼吸器装着と看護師とのコミュニケーションの看護実践向上への示唆を得る。

３．研究の方法

1）研究対象者

ICU に入室し人工呼吸器を装着した患者。ただし、認知症の診断をうけている患者、視聴覚障害のある患者は対象に含まない。

2）データ収集方法

①半構造化面接法

半構造化面接法を用いた。患者への面接は、ICU 退出後、身体的、心理的に安定している日に行った。面接内容は、人工呼吸器装着期間中のコミュニケーションの困難さ、人工呼吸器装着患者のコミュニケーションの困難さに対する対処、そして、看護師に期待するコミュニケーションの実践であった。

②患者の属性

入院診療録より、患者の年齢・病名・術式（手術施行時）・鎮静剤使用の有無、使用時は薬品名・呼吸器装着日数の情報を得た。

③データ収集期間

2004 年 8 月から同年 11 月、および 2012 年 2 月から同年 3 月。

④データ分析

ICU での人工呼吸器装着期間中の記憶があった患者の面接データを録音もしくはメモ

を取り逐語録を作成した。整理した逐語録から患者のコミュニケーションの困難さ、患者のコミュニケーションの困難さへの対処、看護師に期待するコミュケーションの実践に関連する意味のあるセンテンスを抜き出しコード化し、カテゴリー化した。なお、本研究は2004年8月から同年11月に実施した先行研究に続いて2012年2月から同年3月に追加のデータ収集を行い、両期間に得られたデータを分析した。

４．研究成果

1） 研究参加者

研究参加者は15名で男性13名女性2名であった。平均年齢68.4歳（56歳～78歳）、平均人工呼吸器装着期間66時間54分（8時間52分～612時間）であった。なお、研究参加者15名中8名はICUでの人工呼吸器装着期間の記憶がなかった。

2） 人工呼吸器装着患者のコミュニケーションの体験

人工呼吸器装着患者のコミュニケーションの困難さとして、23コード、6カテゴリーが明らかとなった。ICUで人工呼吸器を装着している患者は身体的に重篤な状態であり身体機能が低下しているため【手を挙げペンを保持し筆談することが難しい】【目が見えにくく文字盤が使いづらい】困難さを体験していることが明らかとなった。また、【術前に決めた代替手段を使えない】困難さが明らかとなり、術前に術後に使用する代替手段の説明を受けたとしても実際には使うことが難しいことが窺えた。そして、筆談や文字盤といった代替手段は、音声言語のように簡単に他者にメッセージを伝えられるものではなく、【痛み苦しみがありのままに伝わらない】困難さが明らかとなった。また伝わったとしても【メッセージを理解してもらうまでに時間がかかる】困難さが明らかとなった。そして、メッセージが上手く伝わらない状況やコミュニケーションに時間がかかる体験は、患者に【伝える意欲がわかない】状況をもたらすことが予測された。また、ICUでは十分な休息や睡眠が確保できないことから身体的疲労が蓄積され【伝える意欲がわかない】状況がもたらされることも窺えた。

次に、人工呼吸器装着患者のコミュニケーションの困難さへの患者の対処として30コード、4カテゴリーが明らかとなった。患者は伝えることが非常に困難な中でも【患者の持つエネルギーで精一杯伝える】努力を行っていた。また、【看護師が理解しやすい方法を考え実施する】といった看護師への配慮も行っていた。しかし、患者が伝えたことを看護師が理解できない時には、【我慢する】【あきらめる】といった対処を行っていた。

そして、人工呼吸器装着患者が期待する看護師のコミュニケーションの実践として27コード、6カテゴリーが明らかとなった。人工呼吸器装着患者は身体的に重篤な状態でありメッセージを伝えるエネルギーが十分にない中でコミュニケーションを行っているため【メッセージを素早く理解する】ことを希望していた。また、患者は非常に制限された中でメッセージを送っているため、患者が送ったメッセージが看護師に正しく伝わったか否か分からないため、【メッセージを理解したことを患者に伝える】こと望んでいた。そして、患者は自分から情報を簡単に求めることが難しいため、日時や抜管時期、処置の説明など【患者が求める情報を提供する】実践を望んでいた。そして、簡単に声を出し看護師を呼ぶことができないため【看護師から先に声をかける】実践を求めていた。また、コミュニケーションが困難な人工呼吸器装着患者は、非常に孤独感を感じやすいこ

とが窺え【言葉だけでなく触れる】実践を求めていた。そして、コミュニケーションの困難さとして術前に決めた代替手段を使えない困難さが明らかとなったが、一方で【術前に代替手段の使い方の説明をする】実践を求めており、術前に術後に使う代替手段の説明を受ける方がより使いやすくなる場合があることが窺えた。

３）ICU における人工呼吸器装着と看護師とのコミュニケーションの看護実践向上への示唆

人工呼吸器装着患者は身体的に重篤な状態で代替手段を用いメッセージを発信している。患者は患者の持つエネルギーを精一杯使いメッセージを送っており、コミュニケーションに大きな労力を要することが予測される。そのため、看護師はコミュニケーションに時間をかけることなく、患者が伝えるメッセージを素早く引き出し理解していくことが求められる。しかし、人工呼吸器装着患者とのコミュニケーションは、患者や看護師がどれ程努力をしたとしても、時にうまく機能しない場合がある。実際に患者は、痛みや苦しみがありのまま伝わらない困難さを体験しており、このような状況では、患者は伝えることをあきらめたり、伝わらない状況を我慢したりして対処を行っている。しかし、看護師は諦めることなくコミュニケーションを続け、患者の辛さを理解していることを伝え、患者の苦痛を軽減する看護を提供し続けることが重要である。そうすることで、患者は看護師を信頼することができ、信頼できる看護師がそばにいることで、患者は話すことができない辛い状況を乗り越えることができるのではないかと考える。

また、人工呼吸器装着患者は情報を収集することが難しい。看護師は人工呼吸器装着患者の情報にニーズを予測して患者に情報提供を行うことが求められる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①山口亜希子、江川幸二、吉永喜久恵、ICU 入院中の患者に対する子どもの面会制限に関する実態調査、日本クリティカルケア看護学会誌、査読有、5（2）、2009、33～42

〔学会発表〕（計３ 件）

①山口優、山口亜希子他、救急外来における看護師のアンダートリアージ発生に関する要因、第 13 回日本救急看護学会、2011.10、神戸

②田岡奈津紀、山口亜希子他、ER 型救命センターの看護師によるアンダートリアージ要因の傾向について、第 14 回日本臨床救急医学会、2011.6、札幌

③伊藤由佳、山口亜希子他、3 次救急現場で家族の意思決定を支える看護師が直面する困難と課題、第 12 回日本救急看護学会、2010.10.29、東京

〔図書〕（計１件）

①山口亜希子、学習研究社、Nursing Mook51 基礎疾患・リスク別ハイリスク患者の周手術期看護、2009、5 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

山口　亜希子（YAMAGUCHI　AKIKO）

神戸市看護大学・看護学部・助教

研究者番号：30405336

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし